

短期大学工芸染色研究室の収集資料と授業での活用

佐々木 麻紀子*¹

はじめに

短期大学移管資料展の第6弾として、2019年10月から2020年2月まで本学短期大学工芸染色研究室で収集した染色作品群の展示「染-しぼる、ふせる、おく-」が行われた。

工芸染色研究室で収集していた染色作品は、授業や卒業研究などの参考作品として学生へ例示するために収集されたものである。そのため授業や卒業研究などの参考になるように、数多くある染色技法の中でも大掛かりな設備や道具がなくても学生が応用できるような作品を中心に収集されていた。これらの資料の多くは、工芸染色研究室の桐箱やプラスチック製衣装ケースにそのまま保管されたり実習室に常時展示されたりしており、授業などで必要とする際にはいつでも取り出して学生が触れてみるができる資料であった。

例えば、今回の展示で地色がグレーに見える描き染作品があったが、布端の色から推察するに本来は紺地の作品であった。この作品は長らく額に入れて工芸染色実習室内の壁に展示してあった作品であり、実習室を使っていた多くの学生が目にしてきた。

美術工芸作品としてはこのような作品の取扱いは作品の価値を下げるので良いことではないが、本物を学生へ見せたいという本物教育を提唱していた創立者大江スミ先生の意向を短期大学工芸染色研究室の教員が連綿とつないでいた証でもある。そのため本移管資料展でも汚れや損傷があっても修復せずそのままの形で展示した。

1. 絞り染作品

絞り染の資料は、収集した資料の中でも数が多い。湯のし仕上げまで施されているものと絞ったまま糸解きの途中のものや糸解きだけのものなど絞り工程が途中のものがある。糸解きしただけの資料は模様ははっきりとわからないが、一度伸ばしてしまった絞りは元

に戻らないため、これらの仕上げまで行っていない資料と一緒に絞りの道具として有松絞り用の綿の絞り糸や柳絞り用の縄芯、湯のし釜なども展示した。湯のし釜を使って絞りをゆっくりと広げて模様の出来栄を確認する工程は絞り染の最も楽しみなところである。湯のし窯はスチームアイロンを使うよりも絞りの開き具合を微調整でき、作業に時間はかかるものの絞りを広げていく楽しみがある。

収集した資料の染色技法は、絞り染、ろうけつ染め、描き染、型染等様々なものがあるが、中でも絞り染は有松絞りを中心に多くの資料がある。有松の絞り染工房で直接買い付けたものや、都内百貨店等で購入したものなどその入手方法はさまざまである。収集の意図で作品を区別すると、卒業制作参考作品となるような少し高度な技が必要な作品、藍染標本としての作品、工程標本がある。

卒業制作参考作品としては、多色染の絞り浴衣地や絹の羽織や帯揚げ、描き染と絞りを併用したかけ衿などがある。1色染の多い絞り技法の中で、多色染の浴衣地は3作品あり、連続巻き上げ絞りによる濃淡染分けの作品、連続巻き上げ絞りやつまみ縫い絞りなど学生でもできる基本的な絞り技法を用いて制作されている作品(写真1)、地が三浦絞り、模様が鹿子絞りの2つの技法で絞りが施されており限られた技法でできる作品見本である。いずれの絞り技法も練習の必要は大いにあるものの、特別な道具を使用しない絞り技法であり、多くの学生作品の参考になったことが推察される。



写真1 多色染の絞り染浴衣

*佐々木 麻紀子(ささき まきこ) 令和元年度現代生活学部生活デザイン学科助教

絞り染の資料は綿が多いが、絹の絞り染作品として羽織2点、帯揚2点がある。綿の絞りとは違い、絹地特有のしなやかさから絞り模様は細かい鹿子絞りでできている。いずれも湯のし仕上げをせず、絞ったままの小さく縮んでいる状態である。糸を解いただけのため絞り染の特徴である凹凸がきれいに残っている貴重な資料である。特に羽織は小さく縮んだまま仮仕立てしてあり絞りの模様がどうなっているの一目わからないが、絞りによりどの程度縮むのかその効果をわかりやすく見せる資料としての価値がある。授業で、子供用のように小さい羽織が湯のしをすることで大人用の羽織になることを解説すると学生が生地に触れて引張って確認していた光景が記憶にある。

絞り染の作品の中に1点だけインドのサリーがある(写真2)。絞り技法は世界各地で自然発生的に生じた技法であり、その地域ごとに独特の特徴があることを示すための資料である。日本の絞りはそのほとんどが1枚の布を縫ったり巻いたりして繊細な柄を表現しているのに対し、この絞りは4枚の布を重ねてから絞るという方法で模様が施されているのである。また、この資料は絞りの糸が一部解かれておらず、どのように絞っているのかをうかがうことができる。

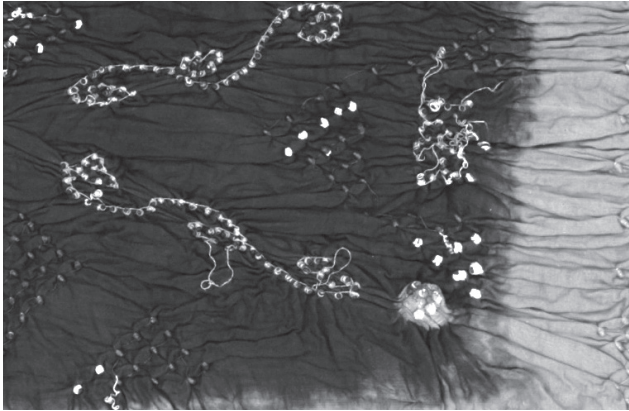


写真2 絞りの糸がついたままのサリー

2. ろうけつ染作品

ろうけつ染はろうを塗ったところが白く防染され模様を表す染色技法である。季節や図柄などに応じて何種類かのろうを混ぜて硬さや防染具合を調節する。移管資料展では筆で防染して多色を染分けている帯や袋物、ネクタイ、ストール、額絵などの作品とチャンチン(写真3)やチャップ(写真4)などを使用してろう防染したインドネシアのクロスや染布、ハンカチなどの作品を展示した。

写真5はろうを模様の輪郭に沿って細く置いて防染し、模様の中を染分けている作品である。ろうを重ね

る順を考えながら色を挿してはろうをおいて防染し、また色を挿すという工程を繰り返して染めている。写真4のチャップのような型にろうをつけてスタンプのようにしてろうを置いて染め重ねるといった方法の作品もある。

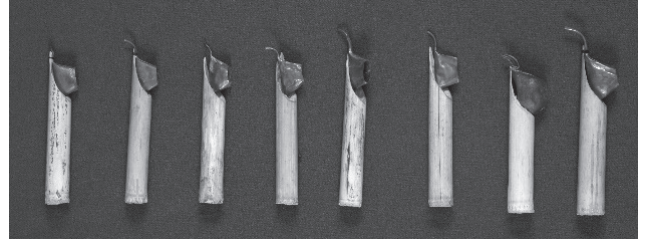


写真3 チャンチン

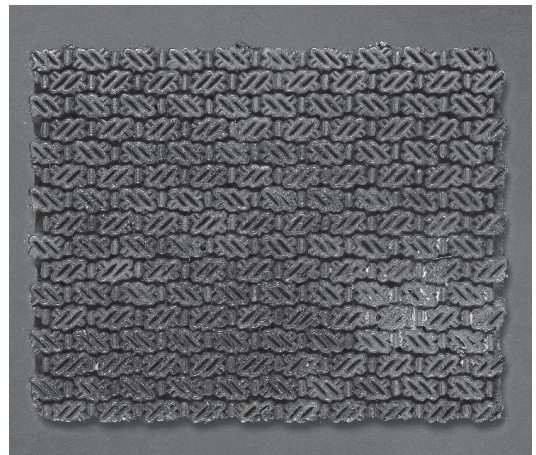


写真4 チャップ



写真5 ろうけつ染の袋物の一部

このようにろうけつ染は作品によってろうの置き方や染色方法も様々である。授業では筆によるろう描きが多く行われ、染める素材も綿布、絹布、皮革など様々であった。ろうの亀裂を作品の特徴として亀裂を活かせるようにろうの配合にも工夫がされていた。例えば布にろうを描きする際は、季節や模様に応じて白ろう(柔らかな亀裂がでる)やパラフィン(防染力がよく亀裂

が出やすい)を6:4や5:5で混ぜてろうの亀裂を調節し、皮革の作品には木ろう(染料がかぶりやすい)を用いて柔らかな亀裂が出す。ろうけつ染の作品類は、このようなろうの特性についても実物の作品を見せることで学生の興味を引き、また理解を深めることに活用されていた。

3. 描き染作品

描き染は無線友禅ともいわれ、友禅糊のような防染剤を使用せずに布に染料で絵を描いていく技法である。あらかじめ布ににじみ止め剤(大豆粉を水で溶いて絞った液など)を塗布する地入れを行った後は自由に絵を描くことができるため、技法による図案の制限が少ない。絞り染のような浸染と違って、筆描きのため使用できる色数に制限もなく、背景も霧吹き染めを併用したりぼかしを入れたりもできる。

展示した作品は、荒井里美の絹布額絵である。工芸染色研究室の収集資料は、描き染だけではなく、ろうけつ染や友禅染など様々な技法で大胆な花を描く荒井里美の作品が数多くある。中でも描き染の作品は、花の陰影をはっきりとさせてあり、ぼかし方、影のつけ方など絵を描く際に大変参考になる作品である。実習室内に常時展示していたこともあり、退色が進み元の色よりも淡い色合いになってしまっている作品もあるのが残念である。作品としては元の色を保っていないため残念であるが、退色にかかった年数分多くの学生の目に触れ作品標本として有効に活用されていたということでもある。



写真6 描き染作品

4. おわりに

本展示の副題「しぼる、ふせる、おく」とは、染色における防染方法である。「しぼる」は絞り染における染料が入らないように糸で括る工程をさす。

「ふせる」は糊やろうを布に置いて防染することをさし、染色の工程では「糊伏せ」や「ろう伏せ」などという。

「おく」も「糊置き」などのように、防染剤を布につけることをいう。「ふせる」と「おく」の違いは、どちらかという「ふせる」はすでに色の挿してある箇所を防染する際の工程で使用する言葉で、「おく」は白生地に糊を置く場合に使用することが多いようである。

いずれにしても、本展示の副題は、様々な防染技法を学んでいた短期大学の染色の授業をよく表しているのではないかと思う。工芸染色研究室で収集していた資料は、学生への参考作品として実際に使用するため、その作品の技法の種類も多岐にわたっていた。作品展を通して、多くの染色作品が本学に所蔵されていることを短期大学の学生だけでなく多くの方に知っていただけたことを大変うれしく思う。

なお、工芸染色研究室の名称は、平成23年に東京家政学院短期大学生生活科学科が廃止になるまでに学科名称変更やカリキュラム変更に伴い「衣類整理研究室」、「被服整理研究室」、「被服管理・染色研究室」、「工芸染色研究室」と研究室名称を変更しているが、今回は短期大学での最終名称となった「工芸染色研究室」で統一させていただいた。